

## 「母国の開発に尽力して 24 年。私が大切にしていること」

JICA ニカラグア事務所 オマール・ボニージャさん

1998 年に JICA ニカラグア事務所でお仕事を始められてから24年間、自国の開発に尽力しているオマール・ボニージャさんは、これまで様々なセクターのプロジェクトを通して母国の発展に尽力してきました。そんなオマールさんが大切にしている心構え、思いについて、インタビューを通してお聞きすることができました。



オマール・ボニージャさん

=====

### ○化学エンジニアから JICA 職員へ

1980 年代に内戦を経験したニカラグアは、現在も貧困率 46.3%、極貧困率 18.3%とラテンアメリカにおいて最も貧しい国の一つです。内戦後のニカラグアで私は化学エンジニアとして、製薬業界でキャリアを積んでいました。化学エンジニアとして働く傍ら、社会発展を支援するためにニカラグアに来た外国人の製薬分野に関する調査に同行するなどの活動を行ってきました。ニカラグアの開発に関わっている外国人との出会いを機に、「母国の発展に貢献したい。自分にできることがもっとあるはずだ」と思い、国際協力の道に進むことを考えるようになりました。



JICA の研修を日本で受けるオマールさん

製薬業界での経験を生かして、保健セクターで自国の発展に貢献できないかと思っていた時に出会ったのが、当時ニカラグアにおいて最大の協力国であった日本の JICA でした。日本と共に自国の発展に貢献できることに魅力を感じ、1998 年、国際協力の世界で自ら経験を積み成長しながら、自国の開発に貢献するために JICA ニカラグア事務所に入ることを決めました。

## ○オマールさんが思う JICA の良さ

JICA に入構して二つの JICA の良さに気づきました。

一つは JICA が人との繋がりを大切にしているということです。金銭的な支援をする団体はたくさんあります。JICA はそうした金銭的な支援だけでなく、それ以上に「人」を通じた支援を大切にしています。例えば、他の協力機関や支援団体は金銭的支援をし、コンサルタントなどの派遣を行うのに対して、JICA では JICA の職員、専門家、ボランティアなどが実際に現地に派遣され、現地に住みながら共に活動を行います。私は日本人とニカラグア人が親密な関係を築きながら共に働くことで、より大きな影響と理解を生み出していると思っており、こうした JICA の協力体制がとても好きです。

二つ目は JICA が様々なセクターでの事業を展開しており、現地職員にたくさんの機会を提供しているということです。ニカラグア事務所ではチャレンジしたいセクターがあれば積極的にそうした機会を与えてくれます。私自身、現在教育セクターのコーディネーター、マナグア都市開発事業のコーディネーター、琵琶湖タスクフォースのリーダーを務めながら、飲料水プロジェクトに参加するなど、様々なセクターに関わっています。こうした一つのセクターに縛られない働き方は、自国の現状に対して理解を深める良い機会になっていると同時に、モチベーションの源になっています。

## ○オマールさんのやりがい

これまで最もやりがいを感じたのは、長年携わっている教育セクターでの経験です。

数年前までニカラグアの教育環境は劣悪でした。調査のために、ある農村部のコミュニティに調査訪問した時は、電気の通らない今にも崩れそうな建物で子供たちがまともな教科書も持たず、地べたに座って授業を受けていました。こうした教育環境に加えて、子供たちの学習率の低さも問題になっていました。こうした課題を解決するために、JICA は学校の修復や増設、数学の改定カリキュラムに則った教育活動の導入プロジェクトを実施しました。

さらに JICA の無償資金協力によって 300 以上の学校が修復・増設され、受動的な数学の授業から実践を基盤とする能動的な授業が行われるようになりました。数学の学



JICA の数学プロジェクトで導入された戦略“Estudio de Clase”を普及するためのユニセフ主催セミナーで講演するオマールさん

習率も伸び、現在では隣国からニカラグアに授業を受けに来る生徒もいます。ニカラグアは 24 年前に比べて質の高い教育を子供たちが受けられる国になりつつあるのです。

プロジェクト実施後、同じコミュニティを再訪する機会がありました。整備された綺麗な学校で、数学の教科書を手にも勉強している子供たちの顔に笑顔があふれていました。JICA ニカラグア事務所で教育セクターの担当者として、ニカラグア人の一人として、多くの子供たちの人生を豊かにすることに貢献していると実感した瞬間でした。

このように、長年ニカラグアの発展に尽力する中で、受益者と話して胸がいっぱいになることがたくさんあります。実際に現場に行き、人とのコミュニケーションを通して人々の生活が変化したのを目の当たりにする瞬間にもっともやりがいを感じています。

### **〇オマールさんが大切にしていること**



**20年間の勤務を表彰されたオマールさん**

私が大切にしていることは三つあります。

一つ目は JICA ニカラグア事務所のチームの一員としての新しいナショナルスタッフに JICA のビジョンを伝えることです。人の入れ替わりが多いニカラグア事務所の中で、常にチームが同じビジョンを持って活動できるように、新しいナショナルスタッフには JICA のメンバーであることが何を意味するのか、どう母国の発展に貢献していくべきか、JICA のビジョンを伝えることを大切にしています。

二つ目は常に新しい分野に活動の幅を広げていくことです。長年教育の分野で尽力していましたが、現在は教育だけでなく都市開発など他分野で働く機会があり、自分ができる協力の幅が広がり、より多くの人の生活向上の手助けができていることを実感しています。こうした新しいセクターのプロジェクトへの参加がモチベーションにもつながっています。モチベーションを保つためにも、常に学び、新しい分野に挑戦し続ける姿勢を大切にしています。

三つ目は「今ニカラグアが何を必要としているか」を意識することです。カウンターパートや政府機関と良好なコミュニケーションをとり、新しい課題や優先すべき課題は何か、アンテナを常に張ることを大切にしています。

こうしたアンテナを張ることはプロジェクトを進める上でも重要です。例えば、ニカラグア事務所が発案した、「琵琶湖タスクフォース」というニカラグア最大の湖であるマナグア湖の水質改善事業があります。この事業を実施するにあたって、マナグア湖が参考にできるような例が必要だと考え、日本の琵琶湖での経験について調べ、この事業に活かしています。日本で行われていた活動を取り入れることで、どう対処してよいかわからない課題への解決方法も見えてきました。このように、プロジェクトを進める中で、常に学ぶこと・探求を怠らず、何が必要か、考えることを大切にしています。



琵琶湖タスクフォースのメンバー  
(左がオマールさん)

### **〇これから国際協力でのキャリアを目指す人へ一言**

国際協力をする上で常に協力の相手を「知ること」と意識してほしいです。協力対象の国を実際に訪問することでしか得られない情報もたくさんあります。そして、現地に行ったら観光ではなく、「現地の人との対話」を大切にしてください。どんなに対象国について知った気になっていても、机上の知識では不十分で、現地の人との対話することで、本当の理解に繋がります。協力する上での基本である「人との対話」を大切にしてほしいと思います。

聞き手:

川瀬 春香

JICA 中南米部中米・カリブ課インターン

活動期間:2022年8月～2022年9月